松屋歌文雑稿

へ[illegible]2
1785

門 へ 利 2
號 1785
巻

佛足結縁歌文集

南都　薬師寺沙門行遍輯

○光明皇后　傳已見于前集

みそぢあまりふたつのかたちやそくさとそだれる人のふみしあところ

○平輿清　江戸神田人俗称小山田将曹　不改称号以前之傳見于前集

名所早春

むさし野やうとこの関もかけてけさ四方にめぐる乃春をむかふらん

鶯入新年語

あさとちし谷の戸あけしうくひすのこゑひけさとしのまうる

明治四十年九月十二日
高田早苗氏寄贈

早春山

こゝ宇にハ春も及ばず明ごとにこしのしら山そふびきめぐれ

春船

のびさき大海乃原をゆく舟の本のゞかすむ春ハきにけり

初春梅

冬ごもりせしハ一枝のへだてにてさくや春べの名さへ梅がさき

霞隔遠樹

としふりし木の末しあるしもみえぬかれ霞こめたる末のよも山

名所霞

ゆくさきも見けしかすみもたちこめぬはてなきむさしの原

原鶯

うぐひすのさへづるおともいとゆるに春風ふきぬ西ひらの原

鶯

浪あらふ磯べの雲の梢あがりに長めし浮世はなるゝうぐひす

梅花風静

やどりさへよそにハあらじ梅の花さそもちらさぬ風ぞかはれり

柳

ぬきみだれふきよれども春風のなびかれる青柳のいと

ひとさはる人はあつさの川ぐまにかくさ柳もなみひくさなり

水邉柳

はるされはたにひとつて春の池のこゝろもあかぬ青やぎの糸

雨中柳

吹きかる風のあとから春雨のまゝ染かへてはるやぎのいと

春雨

冬も又雨ちの日数よとまへて若葉を向かくくるゝ春さめ

春夢

人がからわくさめしかひも紅し梅さくまでのうたゝねの夢

春獣

われもまたたゞよみ行くあらしがにかへりまうさむ山ざとの春

餘寒風

さえかへる風は此ごろ春絶てふくびこゆるうぐひすの聲

野遊

春の野によめれはとつたなさを知らしと母みてやちるらん

花

こゝもよしこゝもよしとひもせじと見れどひとりみるもよし

花初開

これかくふるしひろうて木ひかし打よけそむるされの山びこ

花雲

家をわけて見が花と思ふ人雲をちかきにやなよびさすらん

花影移水

水きよみまうつ見るかげと見なれて波もあだし花に流れなり

名所花

我もまた花によそをそみかくし吉野よ七日山ごもりせん

看花

さくにちるにあかれぬ花これはさてもうつりさけてもかへさ

閑居花

いつまでもうつろふ花とてちざるかれあらしかよはぬかくれがの花

終日見花

見くれて家ぢの友にはぐれぬよひとり残るのおく山

躑躅

ゆふべがまでにおりてもちほこかちまけみえぬ草かのさもつつじ

春霧旅

さびしさよやりのやどりにたぶるるなきかし山のはの夕霧

遅日

ふきよすれのしるしひたとながき日をのどかにのびし声しきぬる

帰雁

人ごゝろ花よみちゆきそめられぬをりいそひてや雁かへるらん

池蛙

おもしろき妹のうたハかのがすむ池のこゝろやそれとなくらん

苗代

ひきうけしねぜきの水乃かけに塩田をしむる絹がなはしろ

令諸茶

ながやどもそいこか孫のぜにのなごちのく山よまかひてぞさく

首夏鵑

鶯乃いろもなきいまだに深ゝへて夏きたるれころのその杜

まとるるとも夏なる風のきよふたえてまなつてぬ篁の枝をし

庭新樹

めづらし紀日かぜのいろとみやまさへなかひすゐる庭乃おもか哉

山新樹

花のなごといそぞめかへて春ぞのこその深山木夏たしらなん

遠山新樹

庭にしげる枝をおもしても遠宿もみどりのいろのめづらし紀哉

里卯花

川ぞひのさとのうの花咲すなりさそめよ浪と何まがふらん

卯花隔水

をちこちの岸べのうつ木たどりゆひて渡す小川の花のかけはし

水鶏

たゝけども水鶏のひなよそられど戸ざさぬ御世に住なるゝ身は

女どもおほぎみまちふ

色もまさるまつひとびしといひあへるをすのと近くなけかしざん

連夜待郭公

かくぎみまちひとの後にもあらぬしかといはれけるかれ

人傳郭公

ほとゝぎす人傳ふにさし声にはやくきかぬをつこゑ

初聞郭公

まちまちとたゞひとこゑのほとゝぎす夢の手まくらにかりし一声

夏山

これるはしる山やこれならんかのこまだらの雪はふじの峰

葵

世をめぐるとてや日かげにあびきつかなそとだ二葉もみすらん

五月雨

みな河柴橋おちて山がつも空手(ムナデ)にかへるさみだれのころ

五月雨久

さみだれの日をふる川も水増て初よりひろきわたりしの郷

軒五月雨

はやせいそし庭の芝生(シバフ)と名草にて池沼なところ流るさみだれのころ

名所五月雨

はちはここを過ぬさきも落そひてなるさきお羽の山の五月雨

夕立晴

ゆふだちの汀も神の杜とめさそて子供ながら石のとどろき

石竹

おもかげはうごきもなきの中にさくやさきの内し床の花

なでしこ

さるもともはぐる世なしでさもゆへんをつむ女がいま本なでしこ

冬瓜

羽根のいろの青づらにけふよるめるらぶくひなろのかも瓜

納涼

秋よまみぬ月がたとしこれ月のかちぬよめづる門すずみかな

川納涼

河おろし吹くるかぜのやどりまでいざ涼ごさみこさのかなん

舟納涼

涼みさし流ひきそむ舟かる風ふきさらん橋の下かげ

竹風秋涼

さしゆるぬまにまずゞしくかよふるあつれしよそもふけの下かぜ

夏秋

ねかりどはみじかうなる夜のまも胡いの床にせくしはまで

夏月

まちし月かうちもにくたるからにてそおどろかす風のすゞしさ

樹上蝉

こもまれど鳴つく枝といつもみてかぜよるぶゆるむしをこの本

夜風

ねつしとてあたんとあけて寝ところへいずしきかぜぞそそにいり来る

かたつむり

風ふかむ葉末は角とさしのべて流ながるのかたつむりかな

蚊帳

吹かよふせとてあたんともさゝで寝し秋床の枕蚊屋でかざりあびきゐる

清季と臺叢ちのみしこは谷に葬りてかへさ乃花の
ほどひろひろしあふぎさよかさなく
末ひろとなりのこしかひもあら川音うばふしるふよりおぶ行なり

初秋風

よふくもなろとおもひし夏生のにもなつくる秋のころかぜ
おもひはあつさむすぶ風なれん萩のそろ花庭にみだいせど

名所秋風

涼しさや利むさびゆる露ちりて身にしこそめぬのべの桐ヶ谷

初秋露

さしくるかへさの袖に秋はぞてぬるふけさの露ぢ乃白露

分萩

こ道もあれ足もあへまてみやぶ袖のをひて分る萩の花露

萩風

おどろきしまろきのもろも世どろいみに吹みえぬ萩乃うえ風

海上霧

霧たちまえにかれて出るる袖の露なそくるすらし海山
中にはるももへがぬくしさるる桜綿が沖の香墨のきり

霧隔行客

見わくれだるびゆく人のうしろ手をかけて目路（メヂ）はるかなるかさ哉

刈萱

ふくかぜに枝となりぬることが代はりみだるるしんのべなかるや

山家秋

のがれきて秋の心をましらなくこゝろのさともとゞむる乃かや

峰さびくあらしにかもひろふなる山家の庭の落栗

七夕雲

こよひとて二乃ほしの間まごめなつくるもうれしくもの八重垣

閑居秋夕

世を秋のそれは落ぞとそめのこひせぬそでもぬるゝゆふ霧

秋鷹

桜とぶ見捨しまゝひきつれて秋乃花野に落るかりが袮

さそびし

野わけて行のべにはずむ虫乃吟とゆふとやどるやま伏

野径虫

くれまもし世方彼方にあきとまり行先まよふのぢ乃追分

月前松風

山ふかくいかもきみて目と耳にあきあかし月かゞ松かぜ

亭午月

中空にてらしの月はそとのにの松の木かげも志ばしあびのぞ

水邉月

山本にすぐ道も細きみち月のかげをやどしてとどめる水かれ

野径月

露をくるのぢ野辺のつきをほといくらびそでに月をしぶりぬ

旅宿月

いる方とゆうし犯てと来後の旅のよいくよ月をとまらん

名所月

いてはらし武蔵野の兄をつくる月の行をみ

惜入月

あかぬてみる間もなかげたる月ふさかへせふしの山を

月前鷹

かりばをと草のさゆえつしせておのれおしでふれる月かれ

十三夜

唐人はいひやらでやまとし一夜この日本にめげる月かげ

秋鹿

小田まもる結が縁いつし一時とおめが兄ぢとて来るさとか

擣衣

みよしの布うつ音近くきこえてもなほやあつの四十五と鶏

名所擣衣

小夜衣につまてさぬるの音ちかしとは真さよの佐かたざさも

松茸

笠ならできのこも志るし秋の香のかをりかはるまつの一山

茸狩

とりあし志めしもろけこそ茸こふかひらぐら秋の山路

紅葉浅

ちぐ孫こし山のひある神のもりぞめずいろよく風にまよし

秋山紅葉

ちふ薄に深山の様のたかれともめまでもちるもろかなる

たれへかちらるそてらつる山かちぢの水しさおていみるらん

紅葉如錦

わこちぢく此方かるさにいろまけて春地衣绝の錦織（ニシゴリ）のさと

夕紅葉

よけまよふ紅葉のもみちきる入あのかねそちらくさこゆる

海辺紅葉

さびしさてふもとこちとこくまのや錦のうへはちりかかる

渕野川の紅葉をよまうりて

水底にちれをうかべてたきの川岸のもみぢながこがるらん

茄子

むさし野もさらけとなりてむらさきのゆかりの色とおもひにぞみる

清水濱臣が三田に小思従事とふことば

いとはれしむかしもそいまのわすれてあくてぞ人とおもげく秋かな

蕉梅風

露ざまも名おもとふじと吹かすや草むらよそとゆく秋のかぜ

残菊夾路

霜拂ふみちはまた袖かへらずは花のところもあへしらぎく乃あれ

落葉

山かぜあらしの風もさそふまで袖のの落葉まくらながるる

夕落葉

落ぞする軒ちらさして月かげのむしろはひろさはゆふべかな

松下落葉

下かげよりも乃落ばを庭とちらせてぞゆふ思ひもよそかげのまつ

田家霜

庭のおもにかけほす稲すゞめさへおどろく本の霧ぞみだれ行

夜時雨

紙やまど枕のよそのよとしぐれぬれぬをいくたびゆめさますらん

初冬月

冴もまだうすしむらしぐれくもりの小舟より川面冬の月かげ

野行幸

そどりし名もたかゆくやさがぶさがゑのとゆきのはつかふるまひ

深夜千鳥

くもさけよあまもさけ芝の浦ちどり見くふけてまふとうらぐぞなく

氷

ちくさも氷のうちにまづゆくおふところとぬれてその水は

湖辺

ゆふぐろはうしろやまかげに鷺もねぬゆるぎしねぐらおもひさめぞ

ゆふしほしよべのひさごをゆりもとめてせがゐの波も湖ぶかりせり

月前水鳥

庭にすむ月をたゞおのが玉床とおもめがほにぬるいけの水とり

埋火

うづみびのもとのみいかくてせまきひとへくるんとおもひけるや

山雪

まくみ山白雪になりにたり窓ひさしたるこゑのをちこち

万木乃いろもみえわかぬまで雪一いろのことしの山

山皆雪

あさいみな降つくしぬる雪をなど志らずとみえたる山のいくさき

山家雪

ゆきふかみとぢこもれども都よりおもひおくれとおぼゆる乃奥

雪中竹

雪ふかきこゑとりへていひぶかになびきそてふしけふけ乃ちし

年内梅

さむからぬ雪いふかき冬までもやはらかく年い下咲乃梅

市歳暮

叶ふ人も都さ名うらんとそ年のさまざま市ぢに立つるひいな

除夜

うれしかりしもうれしさふりもるしきそ又一年のくれぞけのよう

逢恋

さりとてもふかくつもりの逢瀬のなかしにかよるこたびの床

初逢恋

らうえしあふぎと後のよのことをて名もちるみゆくきあづまの空

不逢恋

たのむひやあまぞ神ごこのあみらじこひとひろめさぞあらさん

待恋

まつあまとひいのちつづくむらか禄の声もう見てしと哭ぞそらしらけり

連衣紛恋

松のかどさすがなかけ合とちがして夜ごろ人のまきる

疑恋

朝夜ごとみえれてものとおもふる人の心にきまもやわさぬと

恋心

あぢきなくつらき人のこころゆゑそのがろもせぬおもろ何なり

思切恋

是てのちくいふとても恋の山そこむころの心はいかへさじ

名立恋

うれなのとさどなづりといふあらんなまたぞしこひの山しぎ

馴恋

ふまれどかさなると人の心とてなられだなるし様ぞあやしき

絶逢恋

はまなしとうらみもいまでまぎれなる重ね衣きころもよとまさに

思不絶恋

さ紀のよのむくいっ人はつきなくてなかちぎともなき身なになり

多情恋

よかぐにきてぞかきさすと志つあかし身をさけてもとまれざりけり

不忘恋

さてもわすれむそりいやはるずて沈めばもまるてまぎふのやど

恨不来恋

まつじとはおもへど昔ひろへされてうらみやつまで夕ぐれの空

暁別恋

我の文はくくりへるはなほくのやもめがしすの春のあかずの

朝別恋

朝露とおりゆく人もからじとみ送るそで袖まづ志ぼるるかな

依恋怨隣

あふこといまの垣ごしに妹がこゑ人とかくるとこそ恨みけれ

舊妻恋

河そゞやとせめてこのこし蔓さへもかふるとかされる春の袖ぶりつ

夏恋

いつさ日も風たえしこめ置待せん秋ののにまづへ人のくるやと

まつ身にはみじかき夜の秋にしもながしといひあかす哉

秋夕恋

まつ宵は荻のはむけの夕かぜもそよやと門にうちへせらるゝ

寄秋恋

恋さびしきも秋をしてこぬ人やあきをそゝろに紅葉なるらん

寄月恋

見しひとりくもるとぞみるうき人とふみちのよその月かげ

寄雨恋

まつ安のおもかげいかにそかゝらんいこまの山のかすめばかくさ

妹が門さゆきとまりてひくる見るも妹しきさくらの面

寄泉恋

いかに我も常根の清水見さりの我おもかへろは波てあるらん

寄扇恋

おもひしびあまる月ねとるあふぎさそもゆるしく名をあむる

寄筆恋

筆とれどなにそのことゝはやすぞあしかきも人まつむころかれ

寄枕恋

あかれをふまふに今いふさぬらしおもひしづめる床のまくらも

寄本恋

いそぢれはまたさんとまろげに目はいとざぬ床むすびな床

寄文恋

またにみそぞ恋ぞあせられなる人のこころはうすずみのふみ

寄糸恋

ことわりにまでくるしやむらをおるるんはいとはおもひとけども

寄帯恋

玉のおびのたまくとけてぬる妹がくんとながくゆひとめぞや

寄関恋

いざよひのそを孫まよびてもかりみんこころの関と人やゆるさと

寄暁夢恋

妹がやどゆきつ花もせであけはきの鐘にきこえさる恋の夜

大黒乃賛

得て後は捨るもやはし先は目たうちうち出の槌もてる神

もののふ

そりまちおしてもるかよもなつ矢のやまぢたゞしき武士の道

世

おもてにはよろこびもあるもさてなよがうれふ世のあはれなれ

竹契遐季

哉ちも生かはらん河たけのよの世人乃杖よこさるゝため

年かへ

ほみかへるやちよのかずはちゝまゆをわけてむかふるなかひやるゝれ

移居亦世間

あいそ友ここゑあらしあまたまゝ道うときよの中はつきいもなれども

寢慮不成功

世をふるはさてもみじかきほどなかゝれなかきそでとろどころなる

人情難憑

されどもそ移るのまれぬ世なりなるかしこめる人乃こゝろも

盛者必衰

いてくはれるゝ人ゞとてこゝろにさうかに何かとるべき

厭離不易

さきざころ水くむまざもいとはれていとひちそする世とおもふか

雨中會友

よそにてはあめのあしともかどさしとかへるあふ日乃むつましきかれ

松契齢

みがきつる人の心の玉まつや八千代のくもらぬ光あるらん

喜山松

おのが名をよびしさかのとあくるをやまつは夕山かげにまつらん

揖宿菱

芦花さび移る夜ごろ千とせの菱とるさびしさは哀し

喜松説

へだてなるひとそあふぐたかげもよの心もこる秋の末川

貞典上人増上寺は学問にぞ聞えありけるにより喜

山説

さつきの月の末はひよりしのゝめ学にともまぢしめやも

高須のおほれ殿の四ッ谷の御館の御庭にて

松ハ龍池をそらひをしらるゝにはあるを移しところさ

阿波乃かうれ殿のかぢばしの清館にはくりなへまさ

かゝる新清殿をねえしして

もろ／＼のおもさとゆくる殿あまさでむべきこ縄も若ぐしかりなり

おるじ殿のはうまうら人世濱乃なふぐしくさ出て

清庭のひさしおにり水車とかまへあを二丈あまりに

げて築山にあとれさしたるハいましへとに女あしあさき

ことさなりや

いにしへもかゝるたくみはまなびてや落る瀧乃水かな

富弼が語に守口如瓶防意如城といへるを

口乃てんの城をまもりなだめの禄ことさする時もいうて

みちのくふれ黒石乃城は津軽甲斐守殿の陣所にぞ

甲斐守より出けるぞ人の精の玉とみて

あくびなきもえたりなるをこゝまでこのことゞかけける大和巡ひ

前平戸乃城主静山君の本所の邸にて白拍子の

舞をみて

松浦がた浪乃上舞ひなかろさむしりあくもみめぐみにこそ

さぬかにもみんとしも君拍子かざくて志のぶ姉りしよの江

津軽甲斐守殿のかりにて

こさめふしるかの濱の色枝をとぶにあらさぬみちのわくぞゆかしき

狸のかはに

やまをけさ代々のしふる狸あくまでみてるちゞみかれ

猿

とびつきし梢のくち枝あやくして枝のびる落る木のまさるかな

鳥

さくらしとていそぞつもうとみなんおやと中なよりわ子かゝた

鯨

とほつ人まつらの蜑ぞさぐなるくぢらひきよする近くなり来と
らぬぎ

閨も我皆さすとかとうあざ丸うがちそふく穴よいるらん
清わいでゝ見るもちまざふ穴うあざあるゝれやるとくさきらぬさや

荒屋

まさけだるめだふ荒のうるゝてわとといふるやどのもぬし

庭木

わなしくはわのが生出くまにあ道ぬかまにわしの庭の清くち本

閑居

さびしさのみにあるし山住よ思ひこぬ友もうしとわともので

山家夕

斧の音も向ふ岡よやゝ絶てさびしくくるゝ田上のさとゝ

山猿

さらさゆよふすとの風は吹さてもさそうぬるゝさるびの衣（アニギヌ）

机

わこうの志るしいされにこゆるうゑちうはぬまどのちりぬ文机

色このみたる女

手もふミぢやぐてちるべくされぐと人はけぢかき人のふるまひ

文

墨はうすく草のながれる文これぞわしきちらさし人のおどかか

歌

おもひおもひせぬべきさまあさ方いさぎりの家やよまなし

ひとのおぶらたそしるとさして

おもひきや口よまつ使るあぶなくもせずなづきまへてそしられんとて

和琴

かづまして名いふちぶることのあるも雲のうへまでさこゆなるかれ

太刀

あのふふがゑさびしの太刀いゞづにさすがぬられぬ佩代ぞめでさき

走解

らふくにのりくるふせで見むかぬいわのがこゝろのこまなやゐらん

駱駝

とさばかき称されまぶしろん出馬とみらくるのしき君が御代かれ

項羽

とりをてるわしでのおじいちびぬまも人よあさうんものとおもとび

市隠

よそに身をさけしんの奥まれるやどは市路のかぜもさはらざりけり

老

さりともやるかたなきによのちぢとしのびなれば身は老ぬらむ

牧童

夜のむしにあぶれし牛をひきつれて栗の風わちひろふあげまき

蹴鞠

まりこゆる庭まいるびはあのやわしくはとまいらでたちまいるべき

蕃椒

秋の色とめでつくらひていとからしとあくがとほしさ

こよろぎのいそ

たよろぎ乃浪もやすくはこぬべし浪しづかなる君が代の春

さなり

わがのよ南ざのよどかくらふもやがてゆぎるかくらびのおと

駒

雑坡にのかげの稲は鼻あらしまとの音とぞゆかしてになる

さびしげなる女

あつめところに人ともおとそびさびしさのふくさかなち

心

よろづもおもはざりしはよのひさぐにのそひひさゞしなり

四十三になりける年のはじめに

おもふこといはでぞたゞにくれぬべし何にまぎれて過しきけん

寄苔

年越ぬひまもなくからふいはとさしにいそぐ袖のこき苔むしげるらん

瀧

さし出し梢の中とたちさやこ尾上の山のかさの白布

立されば中にもとごえたえとちるさにこゑはりのこまのなれなれしも

文政上

佐渡国知本よりまでこし康野武左衛門いふ者のうけ

七十人あまりなりとて世にめづらかなるものにいひあやし

けるよりさゝきよちてみる人雲のごとくあつまりおほし

そのやさしき鹿野男ぞあめつくるみるひと人は腰のおがみみ

華頂宮に松尾叢考と奉りて

おくるさまもとゆゑにゆえたゞる老嬌なまりはえぞやさし北

述懐

ともすればにくまれて後の世にぞふるさもなき身によもこそ祈る

身はあがちなるをおぐさて

こゝろをもとげざりし月日はとゞまらずとかくするほどになかくなれ
文政七とせといふとしの葉月の廿日あまりなぬかの
日のくれ時ばかり日ごろやまひの床にふしゐる次郎
子の為次郎清年が身まかれるをなげきて
さりとてはみしやどのこ萩とぞ讀たるのごとにおもひつゞけん
滝よりしと見れかしとげはいひしとこのみまれだのもしとかいまなせん
西念なる弟子が身まかりて七七日のちその日人々とあつま
りてなきさへとかるし婦といふ人のうたよめるに
いと佛はみなのむしろにてふたゝび人々をいひてなぐさむれ

今より四とせむかしの葉月の廿七日に二郎清年
身まかりて世をとぶらひにこそおもひいづれにさし侍るさを
しへ子の慧光法師小竹茂仲などをもとめあまりて
まゐらすなかにしは悲しともかなしくとりにふまへ一首
おもひ出なげきせられしふと年も甥の田中東三郎
が越後の國の脇野町の陣屋にてなくなりけるよし
たよりにつけていひおこせ侍れどもなく潟山なく
がもとより田吹實明が去月の十七日に越後出府
内にてみまかりしよしをつげこしけるにおもふ

いつの世までもつたへ子にしれる人よりかゝやかしの
人はたくなりぬしかもそれぞれいそぢにもあまりぬ
べしさてあらくにかへりごとしてその文をおくに
かくしはべりぬるのおひしそくは神のうきぬのくちぬべきを
あきんのかたどとこ文をうるへてうらゆひさへもいまだしきかな

五十の賀

あきらけるこきみがよのひは十といひてむつきの文よりかへして記

鶴

是も又たのしくてかもおほきみの代々久方の雲井まひ鶴

蓬莱島

おほやさうこのよも地が[illegible]もうけしおよみどは名のみぞ[illegible]は

神祇

ちはやぶる神のひろにようをへて人をうつろをみごのくの此道

書案銘

三冬盡。春立志余利。荒玉乃年能一歳昼波毛。日乃盡夜波毛。夜乃盡多ゝ美許毋。隔留間无久。百不足伊寄對天。古乃籍巻返之。今世乃。事書記之。眼尓毛手余毛馴之天。父母

仁妻子仁比登志久。幾年毛。睦美世年。此文机

両國橋下納涼歌

ちゝの実は。秩父の山ゆ。おちたぎち。武蔵の野辺を。
ながれくる。隅田の川の。下は瀬よ。永代大橋。上は瀬に。
吾妻両國。長橋の。ならべる中に。両国の。橋は下かげよ。
ゆふかぜの。ちさくさくれ。水無月の。あつさ日かげも。忘
れしくば。さけてをらんと。来ればぞ。舟こぞりて。棚
底も。やらにうちながれ。条竹の。ねもすゞのかる。天は空。
焼かとぼり。ともし火の。光まばやく。たちならぶの。岸辺
は町の。あまそねさに。軒をならべて。すむ家は。林のごとく。商
物は。横山かぜり。盛なる。御世のめぐみよ。草ぐらく。やもく
はりつて。うれしとも。あつさもわすれ。かくしは。おのがさま
ざまに。人ごとは。たぬしくなるらし。夏もねぶさに。

詠秋野

萩の花。をばな葛花。をみなへし。朝がほさきぬ。藤ばかま。
みまでもあかじ。家づとと。ふまれども。はなさび。さと庭もうべこ
そふせれ。かりが音も。うべしそ来なけ。なにもまさどほよへし

努べぞ。此努辺に。秋の日ごろハ。いゆりゐてまし。

詠水葱

古能人乃欲勢留。腐水葱。阿都物水葱波。後世尓。比登文字登与備。祢宜登与備。空穂草登母。名仁喚流。葱尓乞有計礼。志我花乃。形尓似多流。天皇乃。神社尓。行幸乃。御輿能上乃。玉能名母貴支殿乃。登階。右尓左尓。立並之。雄柱乃頭在圓金物母諸共尓。奈宜乃花登天。多具比奈久。賍支物叙。此奈良奴。芹尓介微羅尓。久ゝ左ゝ乃。葷支菜期登尓。水葱登云。名波負多礼舒。葱尓及波奈之。

宇治久老神主廿三回忌尓懐舊作歌

神風能。伊勢乃國。佐古久志呂。五十鈴乃宮尓。齋波利豆。仕奉之。暇庭。神能大御世乃。故事手考訂之。今世乃。人手教之。百不足。五十槻園乃。物部能。宇治乃大人我。菅根乃。根毛一伏三向凝呂尓。鮮明之。書著十六。其籍手。讀豆波偲備。其籍手。置豆波嘆息支。對居天。

古登杼波末之遠。對居弖。語波末之乎。山河
毋。五百重隔在。家國毛。離弖住婆。將行須便。
將為須便白土。徒尓。月日来経行久。其加良
尓。米具之登見計武。妻子乎弃親族乎捨弖。
石隠利。加久理坐之波。今波早。廿年餘。三年
経之。昔奈理支登。其月乃。其日尓於也自。今
歳乃。葉月能中乃。四日能日尓。愛子乃阿曽
我村肝乃心乎盡之。百取乃。机代物。取阿謝
遍。志奴備期登之天。御靈乎。祭利慰牟登。玉

梓乃。使能傳尓。風音乃。遠久吾妻乃。國尓志
天。聞天偲婆比。吾毛又。其方尓向弖。言称叙
須留。

高麗一族稲荷大明神祝辞 代妻恋神主村本氏

正一位高麗一族稲荷大明神乃前尓白久。
大明神波神素戔嗚尊乃御子神尓。宇賀之
魂神亦名波專女三狐神止申天。奈良朝御
宇和銅止云留年乃頃。二月初午尓。山城國
紀伊郡稲荷山三箇峰仁顕形座利之与其靈

験乎仰支。其御魂乎祭留社。諸國仁多加利。爰
慶長止云年乃頃。隼人乃薩摩國。物多尓大
隅國。苗刺日向國乃三大國乎。天地乃共遠
長久領之給比迺大守乃殿能遠祖尓座須宰
相乃殿公命乎蒙良之。雲霧乎渉利。雨雪乎
凌天。言佐閇久韓國仁軍立之大仁功乎立
給比迺其時大明神霊狐止現天。軍乃掟告給
比迺事有利介。然尓依天。宰相乃殿至心尓敬比
貴比給天凱旋乃日。薩摩國鹿児嶋乃城内

尓社乎建天。其神霊乎祭給比迺御名乎高
麗稲荷大明神止申須。然而後霊狐乃孫能
狐神乎。殿乃江戸乃高輪乃館尓斎祭良之。年
来乎経比。今茲文政五年七月廿八日先是
詑宣之給比。亦表示毛有尓依天。高麗稲荷
大明神乃一族乎。高輪乃館乃社尓集閉鎮
座女之高麗一族稲荷大明神止御名乎白天。
正一位乃神位授奉利。堅磐尓常磐尓斎奉
留事乎称辞竟奉留。此称辞竟奉波。大守乃

[redacted]

殿止御曹安久長久護利給比福開給比。民乃上中下止人。其心忠誠尓。其身堅固尓。君仁仕奉良武事予護利給比福開給辺止白

手子后明神縁起

常陸國鹿嶋郡東下村の手子后明神ハ。鹿嶋宮の摂社にて。香嶋大神の御むすめの神をいつきまつれるよし。鹿嶋宮の旧記にみゆ。此大神の御子神ハわかならし。三代実録。延喜神名式など考て知らるれバ。さもあるべかし。されど常陸風土記に。香嶋郡の

[redacted]

をとこをとめハ松原ハいへる那賀寒田乃郎子。海上安是乃嬢子とて。かたちきらきらしく。里の内にて透れるをとこをとめなりけり。かたみに名をきゝて。いそぎあはまほしくおもひわたりけり。かくて年月をへぬ。さるに加我毘のをり。たまさか遇てとえて郎子先うたふ。いやせるの阿是乃小松にゆふしでて吾をふりみゆも阿是こしはも。嬢子こたへてうたへらく。しほにハたゝむといへどなせのこが八十嶋がくり吾をみさはしりも。かくてあひかたらまくほれど。人のしらんことをおそれて。かゞひの庭を避て。松の

こけのもとにかくれたり。またところ膝をまじへて。そのころの
はなれるおもひとなりけり。かくて秋のころにて。月は海
なく照まさる。鶴鳴て西のそらをとび。鳫なきて東の雲ゐをと
まさる。山もしづかにして。泉おちたり。秋さびしくして露お
ろし。林には木の葉ちぢみち。海にはしろき浪さわぐなり。
おもひのほかにときさうなりて。秋やうやくにふけなんとし。家
の鶏ちかくなきさ。里の犬とほくほゆ。そこここともの家に
かへるべき時をうかがひて。ぜんさくをまもりして。人のことをとがめんことを
恥て。遂に松の木となれり。その郎子を奈美(ナミ)松といひ。嬢

子を古津(コツ)松といふよしきこえけれバ。安是の嬢子をよめ
るなん社なるも知べからん。そハ下総國乃葛飾乃真間の
手兒奈とも。手兒奈明神とて。神にまつりしためし有
ときこえたり。又手子后(テゴサキ)といふよしも。手子ハ手兒奈も。兒
奈ともよめる歟。萬葉集や曽根好忠が家集などに
みえて。少女といへる名なり。后ハかの字にて。處のさきは
にさし出たる所なれど。手兒崎と地の名によび。后ぐて
社の名にもいひうはせりとみゆ。手兒てふ語のもとハ。母が
手にあるよしにて。古奈(コナ)ハ兒女(コナ)の義也。此社有る地を俗

に波崎(ハサキ)とよぶ。そハなにはざきなりけんと。むかしにより事
もさきとハよこなまりたるにや。そもそもちかごろ世のくせと
しそ。その神社といとこそくしげに。いとたふとげにいひな
し。ぬさ代(シロ)むさぼらんとかまふるともがらがあらひごとして。
あらぬ偽正旅など設出るハ。中々にいぐるしきざれ
まさし。あらるるハあらるまじし。あるまじきハあられぬとし
たるんして神乃み心なめれ。いとかしこし。

中倫堂詩刪序

かうらたいもやく大友皇子。河島皇子などはやく出(イデ)たま
ひしと。懐風藻に載たるに。日本紀や古今集のかな書に。
大伴皇子におこなはりといへれしハ。壬申九年の事により
てきこかされしにやあらん。そのころハしこの道のさか。唐
のもじめまに行るのまで。学徒へしけふり。古体近体の間に
さむるね。弘仁の御世よりそぶりてハ。楽天の風天下にし
きみちて。上中下の人々。あつきあたさざるハなし。神泉
苑。嵯峨の山院。こゝにようて宴を催し。菅原氏。大江氏。
これをもて家とせられ。保元平治のこたびより行あくなく
まハてにしと。室町将軍のころより。五山乃禅僧宋元の

風といさかひて。一時ことさかりなりしに。伊藤仁斎。新井
白石。などいへるすぐれ人。やゝ唐詩をとりき。物部茂卿。服
部元喬。大かたその風をおこせり。近は六如法師。山本信有。
亀田興。ありて。宋詩まなぶ世にあらたまれ。大窪行。菊池桐孫。
柏木昶。などことさかけして。天の下をなびかしたる。市
河世寧ひとり楽天の風をあふぎて。いにしへにかへさんの
心ありといへども。たまたまいへることもまたくかくして。遂によ
ることなし。ちかに李白杜甫が詩をあらひ。元稹白居易が
風をはいで。唐三百年の花実をひろひはつめんところ

ざりし人なり。美濃國人梁卿なり。此ごろ中倫堂詩刪を
ものして。そのこころざせるおもむきをのべたるし。余に
これがはし詞をそへてよと乞ふ。余もとよりいふべくもあら
ねど。いなみがたくて。いささかおしごとをかいはくる
になん。

閑亭十景和歌序

隅田川のひむかしのきしにて。吾國の橋より五町ばかり
上ほとりに。関岡野閑良介がもちたる所あり。そを閑の
やとなんいふ。光俊の翁の詞のこされしきよの名によりて

おほせたゞしなるべし。こゝのみやこにはさ海を十くさ挙たる。
中に。富士の歌ハちやく日野の資矩乃大納言の清筆
そめられたまひしをたうざりてひめおかれ。そ里につぎてこれ
かきつげえ人乃ことのはを残さんとあまたはべへらまぬ。たゞし文
政三年といふとしの弥生のとうかの日に。世にゆるされたる
ぬびと歌人へおつまりて。かのやまとの歌を文にかきうつさ。ある
じの老翁も七郎つゞりいで。ことのむねをすてあやん
ことなり。そもゝかくみえたるしはさまどもかぞへみてて
めばるハ。むとかうくまの宋の仁宗乃嘉祐といふとしの

ころ。宋迪瀟湘乃八景を畫がき。恵洪これが詩をくれるに
はじまりて。つぎゝおほかるあとを残ま程びはさへしなり。
かつ。さそて為相の大納言ろ乃八景をおぼえたまひ。五山の
ほうしたちあまたかうろはべろ。室町の後の内には八景
乃間建られしことなど。そめしきくおはるべし。御國にても
ろ名おかせしハ。義堂和尚の空花集に日向乃国の大
慈寺の八景をかうしやまとうたのこともみえ。ある玄にハ
至徳といふとしのころ。時のかんぞちめうへ人へよろりて。
あかの始るとき都の八景乃か序まの為はべくまし

よしあるなり。そのうち近衛三藐院の大殿。近江の八景
の哥よませたまへるより名だかくなりて。世の八景をとなふる
ものは。近江なるをもとゝせざるはなし。こを依て木高新
が舘にて。後の法興院の大殿の作らせたまへるものに
しるしあれど。いとおぼつかなきことなり。これよりもは
やく聞えしは。唐国のぜしは湘水の六景のからうたなるを。
後には三景。四景。六景。八景。九景。十景。十二景。などなづけ
たる挙はくしがくしまゝ渦水集に景陽の十境。嵯峨の
三境。太平記や翰林葫蘆集に。無窓国師の天龍さるは

十境。空花集に甚後のくにの報恩寺の八境。などいふあり。
こゝもかしこの王維が輞川の二十境などにまなびしなれ
るべし。景は像にて。こゝろのかたちのひろさにいひ。境は界
にて。そのさかひの内の狭さにいふべきことなれど。相通
もして用ひためしあまたなれば。かくあまさぐむべかりけるぞ。さて
関乃庵の十境あり。はなさきあり。ひとつには富士の根に晴なる雪と
なる。甲斐乃くにとするが乃国との間にありて。たかくは
あしがらはこね雨降山など中へそびえたれど。此天雲をたか
うひいでゝましろに雪のぬまるさは。よにたぐへんものな

くみとさされぬ。ゆふつまハ志のぶの岡のいりあひの鐘なり。
何がしのほういんが。はゆの下かえなどよまくらんあとも。今
いひえの山のさ海とうはして。きまにまふさ法の庭
こなれるに。夕ぐれのあどいが稀うちかどろかしきるいとの
ちまふかし。みつまハ葛飾の里の梅なり。田のかのもせ
の実のきる秋よハやうかありて。梅の花ざかりにさそく
しき妻のさ海まうこさうなり。よつまハみやとりのか
まなた也。毋よあかささよ。ほうげきうめきたるハ。いそとる
むらさきとらが志らをぎなるべし。いはほにハ牛嶋よ落る

鴈なりけり秋のさびしさ更におもへそ。世とうし鳴よ
おちくるなん何も遠にうかしき庵。むつまハあ玉の橋
のもとりのほとりの舟なり。なゝつも見ろさを夜とうしと
うかまいで。ふさもののひきよのにいとやう。酒よゑひ法
しはく。船も舟もゆくへさだめざるさ海いとをうし。おふけ
にハ浅草の市の夕嵐あり。かしがましき市のちりも。
さく吹ちらしひされるまゝにそうし。やはよハ隅田河の堤
の桜なり。よし野嵐山の名どころよもおとらで。白浪
たかう折よせたらんさまに咲つゞきたる。えもいひがたし。

かの中将の君は。その古今ミせなんには。いはゞ紅ひ
しとねとはよびなしつべき。さては川には柳原の春のさま
なり。かの町子町家をおとしたる中に。神田川のにほひ
なり。十まちだのほど。其のとどめきえみえするぞいと
めづらしきや。ことには飯坂山の霧也。わきもふえぎて其を
あはせてかすみをそめてるなり。又は夕暮にみえてくし
まがひたる。ともにあきまにあらはる。此十くさの色は
詞のあやの色香をそへて。おのづからとのべられし。文に
作られる美をなせど。こがね乃玉のあるといふべし。

そのをしにたとへのよしかはなくてよとにまことに。やがて
かぶろ筆をそめいでしは。七十翁が心だての友。まろの名の
ゆるぎ高田の清

送攝門法師序

在心室のあるじ攝門法師。浄法ぶとよみ。此の書となる
いとはやくは。なくなりし典まさく暖りて。何くれのふることとかうが
へあらはしは。世のならひもそへたちのまゝに並べて
できしは。著はされし書ども。力車に七車とつむべく少なゆ
ゑ中に。正續三縁山志は。もてはやされたるいさをしのおきざ

むかし。ものゝはじめて笠をかぶり語らひしより。似る人
なくおぼゆるは。魂合へるどちなればにや。そもそも吾齢四
十にして一とせ計つかひして。友どちかたみにこゝちよく
なよかなるどちにもはまでど。やうやう近ごろになりて。ひろく
むつまじきなかの友をぬらひ。菴主法師が三のよき友
といへるさゝぐひにはあそびで。草の道とひかもしは。ことごと
きぬ友なりけり。それは水戸なる旅人小宮山昌秀。小濱の
侯(キミ)のほうまつり人伴信友。法師とくはへて見つかはし三
人なり。法師此葉月のはじめ。伊勢のくにへおもむかす

とて。親しき人々はなひらきやまとの歌はくりなどしはべ。
しりはとりしめるに。おのれもそれまでとてくちを
ぞなるこしをれひねり出つるを。はくなの島の方に
えだなにおんじうめんは人みへとむかひかへし。秀が
しらの葉をふぎうかちう。すけたるうたにこもぐあう
うちらいはそしも。かねとごがましく。よそめくるしから
べし。やそれはそれとして。一こと法師まうさん。お
のれ四年ばかりむかしが乃主をゆきめぐらひしに。
けふもかしこき太神乃。ところよ涙こぼさぬことよ深る

國と傳ことめづらしからんいふべからぬ。山川さやけく。浦のこ
やりおもしろくて。あさ里にめとまらぬ所なんおほかり。か
はなゆゑさハ。古き蹟ぞつ旅出(イデ)。そをなかび。いましへとひとさ
て。むかしぐへ忘るし。車に錦(ニシ)書をもはこそへ。吾よもを見つ
らしさ目ひらか志めたまもちん。百子の出よりことほりて。
さしかふくれつとれど。其の道いとびきあとぐ。いてまわし記
ことさなかしれ。あぐくりへしいきるいさかしさふらし。
かしこさはあふらし心して。あえん。なしてきりぞきるかなれ
移りひ志のほど。あひらにりつりまさ移んあがは。わがぶひ

にくへりゆきさらんいがは。

送ル二平田篤胤ノ一序

わきもせのむかし。因珠庵の阿闍梨難波津よいましへ
ぶり(風)をとなへ。荷田乃宿禰都よふるき(古)学をいざな(誘)ひ
れしより。賀茂の縣主ほぎそなどり。大(イミジ)くそのみと開
かき道さり。縣主の門人へ三百ちあまりが中に加藤宇
万伎。村田春郷。おなじき春海。橘千蔭。伊能魚彦(ナビコ)。本
居宣長。高橋秀倉(ホグラ)。荒木田久老。などいふさとれ人こ
ちおすん。こよなく世よ覚えきる。さそれなかりしを引

よけりて行けり。おのが田川のせきすむ水ようたう
さひ。かしこのねどは庭まごるあまちる、かはづさへ
も。此花あはめることさらのそれはなりけり。あからみ
ゆきまで。其道をくして未分るる中には。なかくしに
孫をばえらしも破あしつで。ほごなくあてくる頑（カタクナ）わしさぬ。
片皮（カタカハ）やぶりの孫ちけ見からうとおどあやしぬさ浦まわを
ひさいまくるもわかめり。行るいれまゞし磨呂（マロ）と名乗（ナノリ）
て。萬葉がりは手づ歌。たとあまにうちだをしんじ。あるは
さる上らふがりて。物語めきさくる法じりの詞。みゝばせ

にかさ出て。あてり殿まるぶりひぐらぬれくる。いとく
をこのまざなりや。それく学はあはひろくこさかれ
くもり。やまとからこしは書はさしなり。佛の経ともと
をふさ孫。がのかぎりちとときそこそ。漁との色ぢを
あのゞしあれるをまざなす道。見づからは十まさきる巻
ゆきしたぶことど。ぢきやうのやうにもてくるへし。それに
わぼえおどして。それいとじきけとにおもひあめし里学（サトガク）
者（シヤ）の。かくさらのが花あてくるは。神も佛もいらまかしも
らひさしとみてなきはん。こに且が友と字田の老翁

は。本居翁の学をつたへて。むかし書をよみきはめ。神の
道をおしひろめらるゝいさを(勇雄)となり。よべどもみな訪(トブラ)ひ来
まして。くる日(明日)朝へ出たつよしのあらまし告きこえぬと
ぞ。余やんごとなきさはりもちのこうぜちにいとまなくて。家
にこもりをれど。なほいめぐりにえせでかへしまゐら
せはるほいなさに。今日ゆくはへてむまのはなむけ
せんとて。乃杯(イハシ)をさゝげて送る詞よいはく。頑(カタクナ)もをとこはさ
として文あまり。みやびの道はこまごとひろかるんゝかくぶ
みことを打出(イデ)しかゝるれをのとは。花のやはらぐ源を清也。

野乃舎記

庵乃ぬしは武蔵野乃さまにたくみおほし。あるは学
ぶもうちはかしこくてきこゆる翁あり。そのさゆまよらで。庵
は名を野乃舎といへるなるべし。翁芳宜園の大人は教
をうけて。かくれにくるかなし。歌のよみくちせはおぼえ人
にもすぐれたれど。その道をまなぶ人いとおほかり。翁が
とほつおや大石良雄ぬしは。木曽義仲朝臣より十代ばさ
かまつこにて。むさし野乃西なる瀧山の城主なり。良雄
ぬし忠(ニツ)しきいさをにて。みやびんもいとふかし。亭子(イホ)を萬

秀竹と名づけてよまれしことは。漆桶老人が梅花翌老
庵といへるがごとし。其の翁が庵は。かの湖山の城よりむ
さし野うちこやりたらんこゝちせられて。むかし志のぶる
る庵の名もなり。此ごろ庵の名のゆゑよし志るしてよ
こせるに。いなびもしかたくて。やがて筆もとるは。うるさき紀
学のともがらまつのやまあるべしと侍。

哀二中村長静ヲ文

阿濃津の産れにてまつりん中村長静は。ちやくから学
よみどとひそめ。行く道の玄よことと不待るいさゝをあまま。

ちかきころ此国の書よまくおもひなりぬとて。去年
より佐藤以弘して我の道がをしへをうけんことを
こふ。さるにかゝる人のかくる流にさけば。已に清水浜臣に名つ
きわくりぬとはよま。さてはわの道がかたふまなばんも何
わざかへるをとあるんとて。以弘よそのよしいなびいへる
に。ふたゝび以弘していふやう。清水氏は歌学(ウタマナビ)の師にして
何も。古ことの道向まなばせんにはさまあそびしてうれ
かはゐるとぞのぞめるたびたびにて。かのまことにあら
される道が。その志をやぶらんもほいなくてむべなひ

しに。いとよろこばひて。ことし文政みとせといふとしの孫
生の廿日あまり二日に。二字をさゝげて余が松の下庵を
訪ひきぬ。もじめでたくひかりいかり。字の名にあはさき
心みえて。遂よみちをもわたし。名をもあげぬべきさへ
あるかなり。そのとりわのまにとへるをちくの内に。曽
丹後掾の字なり。かぢをたえていふ詞ながらやゝあらぬよし
いへり。余こゝろへていふやう。まさごとはいみじくさもなが系よ
ておもしけり。行末のゆうしさは姓ひとつのひごとにても
わしもられぬ。さもし姓氏のまさごとせ。書伺まるい

何まで。いとふるきせちはいまだ。古学のせんだち円珠庵
はあざり。契冲のあざなは空。本居氏。などいへる
もてぐれ人も。みだりまぎらはしぬらしたるを。わのまをもやくよ
まうたがひわあひて。さかしらにかうがへし説あり。今そ
の何かしども引出ていそんいとながけまで。ことに出あるし
たるをみてまうはへべし。かぢをとて梶をはさむさとめたる
緒のたえぬるよしにて。母かぢとあるをかとといへるには何
らむとはいふよ。いとくめでくれがつりて。よろこぶひはらく
まにとさ。そまかり日ごとに文かよはして。何くまでいひこ

たへしに。いづれも耳口風といへるいやしき病にふしてけり
へもえしらぬへだてなりしかど。よりもおとづれそこえざりし
ことはかなむゆかりなり。記さるに以弘まできて泣てふす。
長静はちやくなるもはしこめしかひこばりされ。あふひの
山もここにて終りといふに。いの道も病の床ばをなし。
枝もうさぬだゆうに。ただつくと打ふりまぬ。はかなく
此人のうへをおもひさくに。当はそちにもたしびして。
しるきいまだされし子を。阿濃津の城にとどめおき。
去るけさ君の江戸の營にはかりまつりて。かくおもひ

乃ほかなる志にさせると。いかにかなしくおぼしけん。此
ことはるをひるまのんどむせび。かくしんとさするにも孫
ぬたかりて。以弘もおの道もいひやりたることなし。ただ袂
みしぼちして。

さめてあはらはかともかくさ世中は夢にゆめみて
るもひなりきり。とぞひそうがかきける。

文政十一秊歳在戊子春
三月十七日集成

南都　藥師寺藏版